

2008 年

10 月 27 日（月曜日） - 幸福づくりのさとづくり -

本日、福島県喜多方市で開催された「全国水源の里連絡協議会及びシンポジウム in 喜多方」に参加させていただきました。全国各地からいわゆる限界集落とも呼ばれる「水源の里」をもつ 163 の自治体関係者はじめ約 700 人が参加をして盛大かつ内容豊かなものでした。

限界集落とは 65 歳以上の高齢者が人口の半数を超えコミュニティの維持が困難になりつつあるとされる集落を言いますが、当市においても、限界集落の活性化のため、多くの市内集落の皆さんで構成する連絡協議会を立ち上げて検討を開始していますが、現在、新たに創設された京都府の「共援」の制度を活用して市外の大学生の皆さん達と協働して活性化を図る取り組みを、まずは丹後町上山（京都大学と）、矢畑（立命館大学と）の各地区、久美浜町甲坂（龍谷大学と）地区の 3 集落でそれぞれ始めたり、また総務省の事業の採択を受けて派遣していただいた高野先生（石川県羽咋市）に、弥栄町野間・丹後町宇川地区の活性化のご指導・協働をいただいたり、いろんな取り組みを始めつつあります。

本日のシンポジウムでも各地の取り組みの紹介や地域づくりの分野に通暁されている明治大学の小田切教授のご報告を聴かせていただきました。各地ともそれぞれの過疎化の進行の中で、集落の維持・活性化のために真摯・懸命に取り組みを進めておられます。様々なご報告を聴かせていただくうちに、私として思いましたのは、集落の活性化のためには、もちろん、農商工連携などの分野間の連携の事業や人づくりなど集落の営みや活動を維持・充実していくための取り組みが重要なものはいまでもありませんが、"限界集落がもつ特有の特性を活かしていくこと"が加えて大切ではないかと思うのです。

うのも、都市部とは違い、集落では隣近所のつきあいも多く時に親しい方の死にも接する中で日常に"いのちを感じ考える"ことが比較的多くでき、また人が生きる上で欠かせない水や空気、食料などが周囲に自然のありのままの状態であふれているという環境の中で、改めて人の生のあり方、人の社会のあるべきあり方を原点から見つめ直すうえで一面恵まれた環境にあるといえるのではないかと思うのです。そんな環境の中で目指すべきは、現代社会の中の手垢にまみれがちな経済優先主義でも情報化依拠でもない、人の生の向かうべき原点に帰った、まさに"幸福づくり"のさとづくりであります。人と地球の社会のあり方を改めて問い直すにふさわしい環境にご縁をいただいて、各地各地の伝統、特色を活かした、本当の幸福づくりを手作りで積み上げていく。

そして、「上流は下流を想い、下流は上流に感謝する」というのが水源の里協議会のスローガンであり、水源の里の皆さんから発するメッセージであります。都市と農村の

補完協働、共生の思想を根本に置くものであり、この共生の思想とともに本当の幸福づくり、皆一人ひとりが生き活きとして永く暮らしを続けることができる共に生きる真の活性化を原点から手づくりしていく。そして、それが喜びとともに改めて"地域の誇り"として地域の魂（たましい）となっていく。このように考えれば、限界集落、また水源の里の取り組みは、好むと好まざるとを問わず、今後のわが国社会、人と地球の社会全体のあり方、希求すべき価値観のために先導するとても大きな意味を持っているのではないかとも思うが、ともかくも、今は何より、限界集落、水源の里の皆さんとともに、厳しい環境を前に奮い立ち、全てを積極的な糧に変えて、皆がともに生き活きと生活できる幸福づくりのさとづくりに励みたい。